ものがたり観光シンポジウム

旅すれば 観光学習都市 in 河内長野

発行：大阪千代田短期大学
発行協力：ものがたり観光行動学会

観光の本義

観光学習都市への期待

物語の役割

アジアにおける観光ビッグ

地域からの発信

岐路に立つ

観光を核にし

ニッポンの地域

天誅組と

高野街道

観光戦略とまちづくりの方向

河内長野が誇れるもの

ツーリズムイノベーション・観光革新の時代

「観光圏整備と物語というコンテンツ」

観光をめぐる地殻変動＝観光立

観光圏の整備

観光を通じた

交流の促進

日本の未来・2050

日本低炭素社会のシナ

観光立国時代における諸問題

国家的課題としての

地域再生

旅行ニーズの変化・多様化とその対応

ライフスタイル・イノベーション・

暮らしの革新の必要性

発行：大阪千代田短期大学
発行協力：ものがたり観光行動学会

1

基調講演
観光を核にしたニッポンの地域再生

北海道大学
観光高等研究センター長・教授
石森 秀三

◇挨拶

本日は、「ものがたり観光シンポジウムin河内長野」に呼んでいただきまして大変光栄です。私は沖縄が好きなものですから、今日は竹富島のミンサー織のシャツを着てまいりました。名刺入れも沖縄のものです。このシャツと名刺入れには数字の4と5を象徴する模様がデザインされておりますが、4と5には「いつ（五）の世（四）までも添い遂げる」という意味があり、ここにも物語が込められています。

私の講演のテーマは「観光を核にしたニッポンの地域再生」ということですが、まずは、いまの日本でなぜ「観光」なのかということをご説明させていただいた上で、なぜ「ものがたり観光」なのかということをお話しいたします。

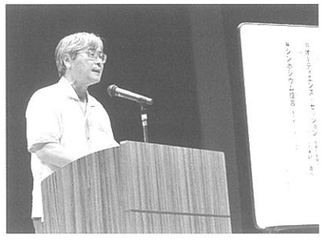
◇岐路に立つ日本

「日本はこのまま衰退の道を歩むのか？　それとも美しき成熟の道へ向かうことができるのか？」「低成長経済の時代の中で内需拡大をどううまくやっていくのか？」「従来の米国追従型外交からアジア重視型外交へどのようにうまく踏み出していくのか？」「民主導の小さな政府は本当にできるのか？」「地方分権国家に変わることができるのか？」……このような状況の中で、観光を核にした地域再生が日本の大きな課題になっています。

◇観光をめぐる地殻変動＝観光立国の時代

わが国では観光は単なる遊びであって、観光で国や地域が成り立つはずはないと考えられてきましたし、観光学という学問ですらも日本では長らく無視されてきました。北海道大学に国立大学で初めて観光学の研究センターが設立されたのが二〇〇六年四月、大学院に観光創造専攻が設置されたのが二〇〇七年四月です。学会においても長らく観光研究、観光教育が軽んじられてきたのが日本です。

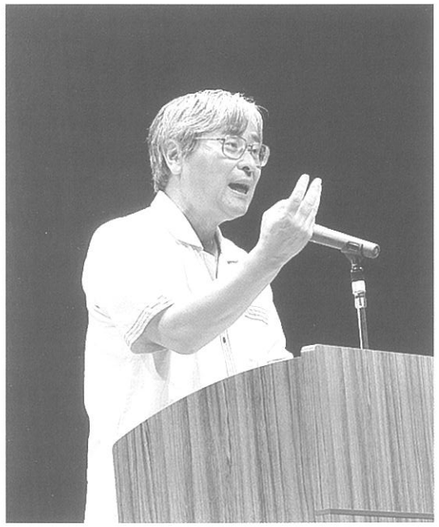
このような状況の中、二〇〇三年一月に小泉元首相のもとで「観光立国懇談会」が立ち上げられ、観光が初めて国家的課題として位置づけられました。小泉元首相は、相対的には厳しい評価を受けておられます。しかし、少なくとも観光ということにつきましては、それ以前の総理大臣が観光を国家的課題と位置づけなかったにも関わらず、小泉さんは、日本の今後の国家のあり方の中に「観光立国」という一枚のカードを入れたということになります。



私も「観光立国懇談会」のメンバーに選ばれ、提言をまとめさせていただきました。二〇〇三年七月には「観光立国宣言」が行われ、国土交通大臣が観光立国担当大臣に任命され、「住んでよし、訪れてよしの国づくり」を推進するために二〇〇八年十月に観光庁が新設されるに至りました。

◇アジアにおける観光ビッグバン

なぜ、いま日本で「観光立国」ということが必要なのかということにつきましては、二つの理由があります。まずその一つは、アジアを中心にして人々が活発に動き始めているということがあります。現在は、新型インフルエンザの影響で動きが鈍っておりますが、歴史を振り返ってみますと、戦争や病気の流行などで動きが阻止されることがあっても、より自由に、より広範囲に世界を動きたいという人々の思いは、止めることができないということが歴史的な事実であります。



中国人の外国への旅行者は二〇〇七年には四〇〇〇万人を超え、二〇一五年には一億人に達すると予測されています。日本人の外国への旅行者は現在だいぶ鈍っており、昨年は一六〇〇万人程度ですから、日本人の二・五倍ぐらい多い中国人が外国旅行をしているという時代になっています。このように、現在は、アジアを中心にして人の動きが活発な時代であり、アジアの活発な人の動きを受け止めるための「観光立国」ということがあります。

◇国家的課題としての地域再生

「観光立国」が必要とされるもう一つの理由は、今日の私のテーマであります「国家的課題としての地域活性化」のための観光の活用です。いま、日本では少子高齢化が進んでいます。地域の人口が少なくなり、高齢化が高まりますと地域は生産力だけでなく消費力も衰え、地域経済が縮小せざるを得なくなっていきます。北海道はすでに数年前から経済縮小の時代に入っていますが、今後はどの地域でも経済が縮小していく時代を迎えます。そうなると、定住人口は増えません。そのような状況の中で、地域を活性化するための手法の一つが、交流人口を増やすことで地域の活力を維持していくという方法です。

いま、北は北海道から南は沖縄までどの地域においても、一人でも多くの人々を気持ちよく受け入れ、リピーターになってもらい、地域の活性化に貢献してもらおうという時代が始まっています。

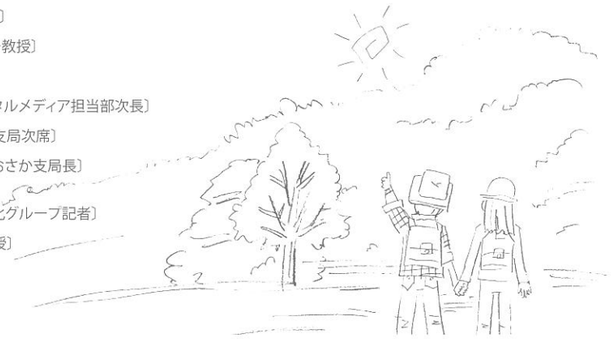
石森秀三（いしもり・しゅうぞう）
1945年、神戸市生まれ。北海道大学観光学高等研究センター長。観光文明学・文化開発論専攻。旅の文化研究所運営評議委員。ものがたり観光行動学会特別顧問。
主な編・著書に『エコツーリズムの総合的研究』（国立民族学博物館）、『観光の20世紀』（ドメス出版）、『観光と音楽』（東京書籍）など。

パネルディスカッション

「ものがたり観光の視点」その可能性と地域のチカラ

パネリスト
- 加藤　晃規〔関西学院大学副学長・教授〕
- 白幡洋三郎〔国際日本文化研究センター教授〕
- 高田　公理〔佛教大学教授〕
- 岡崎　秀俊〔産経新聞総合企画室デジタルメディア担当部次長〕
- 岩井　孝夫〔読売新聞大阪本社和歌山支局次席〕
- 松井　宏員〔毎日新聞編集局社会部おおさか支局長〕

司会
- 今井　邦彦〔朝日新聞大阪本社生活文化グループ記者〕
- 李　有師〔大阪千代田短期大学准教授〕



パネリストそれぞれにとっての「ものがたり観光」とは

司会／李◆まずは、パネリストの皆さんそれぞれにとっての「ものがたり観光」とはどういうものなのかということを簡単にお話ししていただきます。まずは松井さんからお願いします。

松井・❖毎日新聞では、この4月から月曜日の夕刊で、「旅・まち・発見」という連載を始めております。

これは、ものがたり観光行動学会プレゼンツということで、学会発起人の先生と一緒に「ものがたり観光」を実践するという、まさに「行動学会」の名にふさわしい連載です。

先日は、李さんと一緒に大分県の竹田に行ってきました。市役所に女性の顔をした「姫だるま」が飾ってありましたので、その工房を訪ねてみました。このだるまの何が素晴らしいかといいますと、だるまの本体に使う新聞紙は、毎日新聞でないといけないということで、たいへん素晴らしいだるまさんでした。まあ、それはジョークとしても、この旅は最初、フェリー会社の方に案内していただいたのですが、船の中で、その方のご実家が大分で、醤油は自家製だというお話を聞きまして、到着した朝に突然ご実家にお邪魔し、自家製の醤油や味噌をつくっておられる様子を見せていただきました。このように、その地域の人たちとの思いがけない交流やふれあいが生まれるということが「ものがたり観光」の醍醐味ではないかと思います。商業ベースに乗っていない資源はたくさんありますので、それらを掘り起こして、素晴らしいということを広く認識していただくことを通じて、地域の方たちにも元気になっていただくというのがこの学会の役割であると思います。

松井宏員（まつい・ひろかず）
毎日新聞記者 大阪本社夕刊編集部長
ものがたり観光行動学会 理事

岡崎❖もともと、物語という言葉は座りがよくて、どんな言葉に付けても分かった気になります。「ものがたり観光」という言葉も、皆さん分かったような気持ちになっておられると思いますが、さて、物語をシャープに語れということになりますとなかなか難しいことです。また、パネリストの皆さんそれぞれの「ものがたり観光」についての話がいろんな方向に広がれば広がるほど、とりとめがなくなってしまうのではないかと思います。しかし、それでは困りますし、この会が持続できないことには意味がありません。したがって、せっかくこのような場を設けていただいたのですから、まず、「ものがたり観光」をシャープに語るというよりは、「ものがたり観光」の最大公約数的なものを皆で共有できないかと思っています。今後の「行動」を通じて、「ものがたり観光」というものが縦横無尽に展開されていけばいいのではないかと思っています。

岩井❖一昨年から和歌山支社でデスクをやっており、朝出社したら日付が変わるまでずっと机に座っています。旅人の自由さとは正反対の生活をしています。新聞記者という仕事は、転勤が多い職種に入ると思いますが、私は、徳島市、徳島県阿南市、明石市、神戸市、大阪本社、和歌山市と、大阪湾を一周するような形で転勤をしてきまして、悲喜こもごもといったところです。父に、会社の金で旅行させてもらっていると思えばいいやないかと言われ、気が楽になりましたが、そのように考えてみますと、ずいぶんいろんな旅をして物語を味わってきたなという気がします。「ものがたり観光」とは何ぞやというのは難しいことですが、旅先で知り合いができて付き合いが続けばいいし、続かなくても、あの人どうしているかなと思い出せるような旅ができれば、その人にとっての「ものがたり観光」なのかなと思います。

司会／今井◆私は、朝日新聞の生活文化グループというところにいて、文化、歴史の取材を担当しております。普段は大学や自治体の文化財課などのアカデミックな人たちに接することが多く、私の取材対象が考古学ということもありますが、そのような先生たちはどちらかといいますと、歴史的な事実は重視されますが、物語への関心は薄いような印象を受けます。

最近、各新聞社が大きく扱ったので覚えておられるかも知れませんが、奈良県桜井市の箸墓古墳から出土した土器を放射性炭素年代測定という方法で測ったところ、卑弥呼の年代と大体同じであるという結果が出ました。それで、ある先生が卑弥呼の墓である可能性が高くなったということを考古学会で発表しましたところ、その先生は学会で叩かれました。古墳の年代が卑弥呼の年代ぐらいだということが分かっただけであって、卑弥呼とどう結びつくのだという学術的な確かさという点からの非難です。ところが、この先生が奈良大学で、「邪馬台国と卑弥呼」という特別講義をされたときには、大勢の方が講義を聴きにこられました。卑弥呼という物語性のある登場人物が出てきますと、皆さんたいへん興味を持たれます。学問は伝承や推定の上の話を嫌がりますが、伝承や物語を、地域や学問に興味を持ってもらうためのきっかけにするようなうまい落としどころが見つけ

岡崎宏俊（おかざき・ひろとし）
産経新聞 大阪本社 総合企画室
デジタルメディア担当部次長